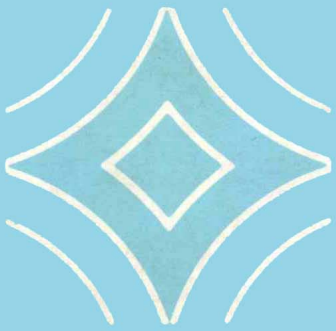
味わい方叢書

今昔物語の味わい方

長野甞一



明治書院

わい方叢書

今昔物語の味わい方

長野甞一

明治書院

長野甞一（ながの　じょういち）
大正4年，新潟県佐渡に生まれる。昭和14年東京大学国文学科卒業。説話文学専攻。現，立教大学教授，文学博士。著書：『今昔物語』（日本古典全書）『現代語訳 今昔物語集』『古典と近代作家―芥川龍之介―』『説話文学辞典』（編著）『現代人のための 平家物語』『平家物語の味わい方』その他がある。

味わい方叢書　今昔物語の味わい方　880円

昭和49年11月5日　印刷
昭和49年11月10日　発行

© 1974 J. Nagano

著者　長野甞一
発行者　株式会社 明治書院
代表者　三樹彰
印刷者　奥村印刷株式会社
代表者　奥村正雄
発行所　株式会社 明治書院
東京都千代田区神田錦町1の16　郵便番号101
電話(03)294-5336(代)　振替口座　東京4991

0393-24609-8305　浦野製本

はしがき

一、本書は『今昔物語集』に収められた一千有余の説話の中から、傑作、おもしろい話をえらび、これに「鑑賞」を加えたものである。

一、えらんだ説話は十七編で、「天竺の部」から三編、「震旦の部」から二編、「本朝、仏法の部」から四編、「同、世俗の部」から八編である。これは『今昔物語集』全体からみれば九牛の一毛にすぎない。採りたい説話は外にもまだ多いのだが、紙幅の関係で十七編にしぼらざるを得なかった。

一、本叢書の趣旨が「味わい方」（鑑賞）を主にするものであるから、「語釈」「通釈」「本文の異同」などは、いっさい省略した。

一、古典研究では「鑑賞」の部面がいちじるしく立ちおくれている。本文批判とか成立年代の考証には千万言を費やすにかかわらず、鑑賞や批評は数行ですますという傾向がいちじるしい。前者は研究の基礎部門であり、後者はその仕上げである。どちらも大切で、基礎を欠いた建築は砂上の楼閣にすぎず、仕上げを欠いたそれは、土台が雨ざらしになっているにひとしい。『今昔』については戦後、基礎部門の研究は大いに進んだが、仕上げはほとんど行われていない。本書がその一歩となってくれれば幸いである。

一、本文としては、山田孝雄・忠雄・英雄・俊雄四氏校注の『日本古典文学大系今昔物語集』五冊（岩波書店）を用い、他の諸本を参照した。ただし、表記や行や訓み方は多少改めた。

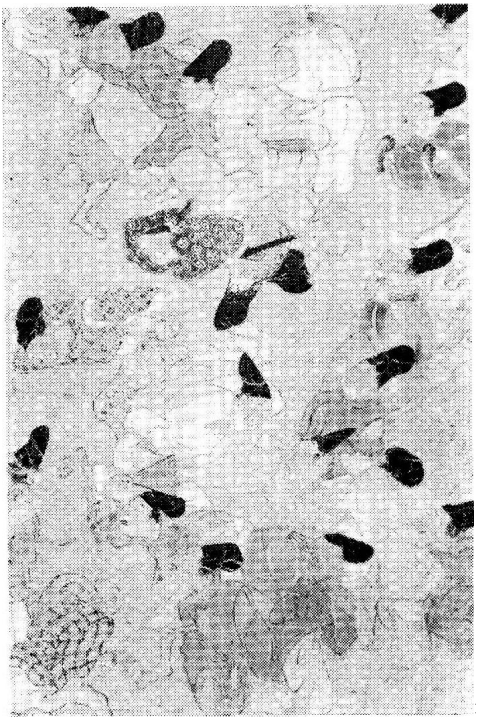
本文中に（一・八四ページ）などとあるのは、右底本の第一冊、八四ページの意である。

一、『今昔物語集』は、日本における最大最高の説話集である。これに初めて接する人は、日本にもこんなおもしろい話があるのかという驚きを禁じ得ないであろう。

戦後の国語改革によって、古典に対する一般の読解力は目立って落ちたという。敗戦による衝撃で、古きものはいっさい無価値だ、となす考え方も加わって、古典はますます国民の目から遠去かった。だが、祖先のこの文化遺産には、古人の生活の知恵が凝縮されている。この物語の中に飛び回る多くの男女の体臭に接して、読者は千年という長い時間の距離を忘れるであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今昔物語の味わい方　目　次



平安時代の庶民のすがた（「伴大納言絵詞」より）

はしがき 1
隠形の薬 7
断金の契り 25
一角仙人 34
流詩に結ばれた恋 52
卒堵婆の血 65
道成寺 76
源信僧都の母 90
六の宮の姫君 111
悪人往生 129

乱酔の一夜　148
大学生と相撲人　167
あさましき病　185
保昌と袴垂　202
馬盗人　211
稲荷詣で　220
倒れた所で土つかめ　233
小屋寺の鐘　244
解説　255

隠形の薬

今は昔、西天竺に龍樹菩薩と申す聖人ましましけり。初め俗にましましける時には、外道の典籍の法を習へり。その時に、俗三人ありて、語らひ合はせて、隠形の薬を造る。その薬を造るやうは、寄生を五寸に切りて、陰干に百日干して、それをもつて造る薬になむありける。それをもつてその法を習ひて、その木を髻に持しつれば、隠蓑といふらむ物のやうに形を隠して、人見ることなし。

しかるに、この三人の俗、心を合はせて、この隠形の薬と頭に差して、国王の宮に入りて、諸の后妃を犯す。后たち、形は見えぬ者の寄り来りて触ればへば、恐ち怖れて、国王に忍びて申す、「このころ形は見えぬ者の寄り来りて触れはなむある」と。国王このことを聞きて、智りおはしける人にて、思ひ給ふやう、「これは隠形の薬を造りて、かくせるにこそあるめれ。これをすべきやうは、粉を王宮の内にひまなく蒔きてむ。されば、身を隠す者なりといふとも、足の形付きて、行かむ方は騒くあらはれなむ」と、構へられて、粉を多く召して、宮の内にひまなく蒔きつ。粉といふはは灰になり。

この三人の者、宮の内にある時にこの粉を蒔き籠めつれば、足の跡のあらはるるにしたがひて、大刀抜きたる者どもを多く入れて、足跡の付く所を押し量りて切れば、二人は切り伏せられぬ。いま一人は龍樹菩薩にまします。切られわびて、后の御裳の裾をひき被ぎて臥し給ひて、心の内に多くの願を発し給ふ。その気にやあ

りけむ、二人切り伏せられぬれば、国王、「さればこそ、隠形の者なりけり。二人こそありけれ」とのたまひて、切ることを止められぬ。その後、人間をうかがひて、この龍樹菩薩はあひ構へて宮の内をば逃げ遁れ給ひぬ。

その後、「外法は益なし」とて、□の所におはして出家し給ひて、内法を習ひ伝へて、名をば龍樹菩薩と申す。世こぞりて崇め奉ること限りなしとなむ、語り伝へたるとや。（巻四第二十四話「龍樹俗の時、隠形の薬を作れる語」）

【味わい方】 いわゆる「天竺の部」は五巻、そのうち巻一から巻三までは釈迦の誕生から八相成道、入滅にいたる一生を記したもので、仏教史のいわば正編に相当する。正編だから最も大切な巻々になるのだが、説話としてはあまりおもしろくない。巻一の第三話「悉達太子、城にありて楽しびを受けたまへる語」などは、都城の四門を出た悉達太子（釈迦）が、老・病・死の醜汚苦患を初めてその目で見、最後に比丘の姿を見て、深くこの人生をいとい、出家遁世への素志を固める契機となった話で、説話としてもおもしろく、構成も緊密で申し分がない。申し分はないけれども、あまりに有名な話で、いやしくも仏教を少しかじったほどの人なら、だれでも知っている説話であるし、それにいささか長すぎるので、本書では割愛した。身は浄飯王の太子と生まれ、十七歳にして耶輸陁羅という美人の妃を迎え、珍味佳肴を飽食し、あまたのみめよき侍女に囲まれて、悔いなき青春を謳歌しておるであろうと思われた悉達太子が、侍女の報告によれば、妃と睦び給うことはないというではないか。驚いた父の浄飯王は、いよいよ美女の歌舞を盛んにし、太子の心を慰めようとはかる。にもかかわらず、太子の憂色は日とともに濃くなりまさる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

折りから宮廷の園には百花が笑み、泉の水は清く涼しい由を聞いて、太子は宮門を出て外に遊ばんとの心ざしを父王に告げて許可を得る。かくして最初は東の門、次いで南の門、さらに西の門を出て、そこに老人・病人・死人を見た。百楽あって一苦をも知らぬ温室育ちの皇太子が、初めて醜汚を目にしたのだ。初めて世間を知ったのだ。宮門一つを隔てた城壁の内と外では、美醜・苦楽・幸不幸が、このように際立っていることを知ったのだ。

最後に北門より出た太子は、そこに比丘の姿を見、それが五欲を断って解脱の岸に達した者であることを知った。このとき、太子の憂色はほぐれ、口辺には初めて微笑がただようのを、お付きの侍者はたしかに見た。

太子が皇太子の地位を捨て、宮城を出て山に入り出家したのは、それから二年後、十九歳の時であった。

彼が天魔外道の妨害を排し、いくたの艱難の後に正悟成道を遂げるには、さらに多くの歳月と困苦を経なければならなかった。が、その契機をなしたかの話、初めて世間の実態に触れ、老・病・死の苦患を目撃して衝撃を受けた説話は、釈迦にまつわるどの説話よりも印象が鮮明である。

太子のような身分、太子のような経験は、一般人の目から見ればごく特殊なものであろう。十七歳にもなって、老人や病人や死人がこの世に存在することを初めて知るなどという事例は、一般人としてはあり得ない。しかし、さしたる苦労や悲しみを知らなかった者が、突如そうした悲劇に直面して出家するというケースははなはだ多い。病気、失恋、失脚、親しい者の突然の死、それらに無常を感じて出家したという話はすこぶる多い。してみると、悉達太子の出家譚は、その純粋化されたもの、い

わばもろもろの出家説話の原型であるといってよい。人間の力ではどうにもならぬ悲劇に当面したとき、人はより大きなものの手にすがろうとする。神や仏への帰依、宗教の起源はここにある。そのヒナ型が、件んの説話ではあるまいか。読後の印象が極めて鮮明なのは、それがわれらの宗教心の核に触れるからであろう。

が、こうした興味ある説話は数少ない。釈迦の超人的な行跡を語る説話は、仏教を篤信する者にとってはありがたい話に違いないが、信仰の埒外にある者にとってはさしたる興味がない。それよりもむしろ巻四や巻五にある人間くさい話の方がおもしろい。「雑話」とか「世俗譚」と呼ばれる話が断然おもしろい。これは「天竺の部」に限らず、「震旦の部」でも「本朝の部」でも、全く同様である。同じく仏教説話であっても、出家譚が興味深いのはこの理による。そこには主人公が出家する機縁となった在俗時代の失敗や苦悩、悲涙が塗り込められているからである。

本編もその一つ。龍樹菩薩が出家する契機となった失敗譚が、ここには語られている。隠形の薬を造って身を隠し、国王の後宮に忍び入って美しい后妃を片っ端から犯す。その欲望、その行為は、放恣無頼の青年と全く変わりがない。女性の敵、貪婪(どんらん)な色魔として時折り新聞の三面を賑わす変態性欲者の姿がここにはある。

『今昔』の本文では、〃初め俗にましましける時には、外道の典籍の法を習へり〃と、ごく簡単に記されているが、その典拠となったといわれる「法苑珠林」巻五十三、機弁編には、「龍樹菩薩伝」や「付法蔵伝」が引かれ、それらによれば、龍樹は南天竺の波羅門種に生まれ、幼にして極めて聡敏、

弱冠にして天文・地理・星緯・図讖などの諸術に精通し、名声は四方に聞えた秀才であったという。〝始生之時、在二樹下一。由レ龍成道、因號二龍樹一〟とあって、龍によって成道したので龍樹と名付けたという。ただし、これは後年のこと。

その時に、俗三人ありて、語らひ合はせて、隠形の薬を造る。

と『今昔』の文章はつづくのだが、これも「法苑珠林」には、そのいきさつがもっと詳細に述べられている。それによれば、龍樹には友人が三人あって、ともにすぐれた知恵の持主であったが、龍樹を加えて四人の若者が議するよう――われらは天下の理義に通じた身であるが、何をもって楽しみとしよう、と一人が言い出すと、他の一人が、それは好色の情をほしいままにするにしくはない、これこそ最上の快楽である、ついては隠身の薬を探し求めて、かの願望を成就しようと提案する。それを聞いた他の三人は、それだ、それに限ると、たちどころに相談は一決した、とある。

してみると、龍樹らがこのような欲望をいだくに至った根因は、慢心、増上慢にあったことがわかる。幼にして無類の聡慧をうたれ、弱冠にして諸術を極めたとうぬぼれる若者の慢心が、このようにおおけなき野望をいだかせる原因になったらしい。

「天下理義開二悟神明一。洞発幽旨増二長智慧一。若レ斯之事吾等悉達。更以二何方一而自娯楽。」

と、〝相ともに議し〟たとあるから、この口振りからも増上慢のほどが知れる。われらは天下の秀才、知恵無類のエリートだというぬぼれから、そういうエリートが多少はめをはずした娯楽を求めたとて、何のはばかることがあろうという欲望へと飛躍する。

説話ではこうして隠形の薬を調合し、身を隠して王の後宮に忍び込むという段取りになるのだが、

実際にはそこへゆくまでにワン・ステップがあったと私は考える。酒色に耽溺するという中間の段階があったと思う。いくら増上慢の彼らでも、ただちに国王の後宮に忍び入るという大胆不敵なふるまいに出たとは思えない。富と知恵と名声のために、彼らは周囲から、チヤホヤされたこと疑いない。その追従をよいことに、酒色にふけったに違いない。だが、たえず快楽を求めるものは、等質等量のそれではもはや快楽と感じなくなるのが常である。より強烈な刺激、より危険なそれでなくては、その欲心を満足させることができなくなる。後宮に忍び入るという発想は、かくして並みの快楽に飽いた果てに生じたのに違いない。

説話は、途中のくだくだしい道行きを切り捨てる。平凡な寄り道はしないものだ。特急列車のごとく、沿線の小駅は黙殺するのが習いである。龍樹らが並みの快楽をほしいままにしたことは、語るに値いしないものとして黙殺されたに違いない。

後宮——古代の国王のハーレムには、あらゆる美女、あらゆる快楽が、一人の専制者のために集められている。国王がいかに身体強壮であろうとも、精力絶倫であろうとも、一夜の婬楽の対象となしうる女性は限られている。同時に数人の女性を相手とすることは不可能である。されば後宮には、満たされざる女性の青春の溜息(ためいき)がうっとうしく立ちこめている。天下の美女、傾国の佳麗が、賞玩するもののない夜桜のごとく、咲き充ちた容色を空閨にむなしく朽ちさせてゆく。それが後宮である。ここは古代インドの後宮であるが、後宮という言葉で作者がすぐに頭に思い浮かべるのは、平安内裏の後宮であり、中国王宮のそれであったはずである。王昭君や上陽人の悲劇がまつわる漢・唐の後宮であったに違いない。

そういう後宮が、欲求不満の若者たちにとって、垂涎三尺の理想郷であったのは当然である。隠身の術を使ってそこへ忍び込むことができさえすれば、美女も佳人も寄り取り見取り、すさんだ売女（といっても、古代インドに売女がいたかどうかを私は知らないが）や、ひなびた村娘とは全く違う「玉の肌え」を、心ゆくまで賞玩することができるのだ。放恣な若者にとって、これはまさしく夢見心地の快楽へと空想をかき立てたことであろう。この部分『今昔』では至極簡単に叙せられているが、後来の「三国伝記」では、

興ヲ結ビ志ヲ同ジウスル友三人有リ。皆一寺ノ明哲也。語リテ云ハク、人間ニ生ヲ受ケテ、電光朝露ノ命ヲ持ツナリ。仍ツテ心ヲ発シ性ヲ延ブル外、望ム所ナシ。サレバ好色ヲ求メ、婬楽ヲ恣ニセンノミコソ、心神ヲ楽シマシムル道ナルベキ。但シ我等国王大臣ニモ非ズ、何トシテカ心ノマヽニ女境ヲ求メ得ベキト云フ。

（巻二「龍樹大士術法昔事」）

とあって、より詳しく、より具体的に説明されている。

この説話のおもしろさは、奔放な空想の秀抜にある。隠身の術を施して国王の後宮に忍び込むというのがその一つ。他の一つは、そうした目に見えぬ曲者たちを捕らえるのに、床に白粉をまき、そこにつく足跡を頼りに切り伏せるという着想、この二つである。

さていよいよ隠身の薬を製造する段取りになるが、これも『今昔』では、

その薬を造るやうは、寄生を五寸に切りて、陰干に百日干して、それをもつて造る薬になむありける。それをもつてその法を習ひて、その木を髻に持しつれば、隠蓑といふらむ物のやうに形を隠して、人見ること

なし。

と、しごく簡単に叙せられている。寄生を五寸に切って百日陰干にするだけで、それを髻に指せば身を隠すことができるのであれば、私もぜひやってみたい。そうして後宮に忍び込むのは、もはやこの老骨では無理であるし、それに昔のような後宮というものが現在ではどだいないのだから、これは願い下げにするとしても、使い道は他にいくらもある。試験問題や外交の機密文書を盗み見るなどということは、朝飯前である。野球で相手方の監督や捕手のサインを盗み見て、これを即刻味方に通報するなどということも、一挙手一投足で事足りる。いや、こんな空想は考えてみれば小さいことだ。世界の歴史を動かす大統領や首相のそばに影のごとくにつきまとい、その政略の機密を探るというのはどうであろう。古来、幾人かの野心家たちが、こんな空想をほしいままにしたことか。それもすべては隠身の術に成功するという仮定の上に立っての空想である。

が、肝腎の「隠身」が、そう簡単にできるはずがない。事実、例の「法苑珠林」では、龍樹らがこれに成功するまでには、かなりな紆余曲折があったことを記している。彼らはまず「術士」の所へおもむいて「隠身の法」を伝授されんことを求めた。求められた術士は考える——彼らはみな氏素姓賤しからぬ波羅門種の秀才たちだ。このプライドの高い驕慢な秀才連が、自分の所へ頭を下げて来るのは、ひとえに隠身の術を学びたいからに外ならない。彼らはみな博学多識、俊敏な頭脳の持主ではあるが、この隠身の術だけは知らないのだ。ここで自分がもしかの術を伝授したなら、自分としてはもはや彼らに教えるものは何もなく、たちまち見捨てられるに違いない。——と、そう思案した術士は、隠身の青薬一丸を彼らにあたえ、この青薬を水で磨き、眼瞼に塗れば、身を隠すことができると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com